

## 所沢市医師会学術講演会

平成 27年4月23日(木) 19:15～(本講演は19:30～)

所沢パークホテル

座長 今城内科クリニック 院長 今城 俊浩 先生

講師 獨協医科大学越谷病院 糖尿病内分泌・血液内科

教授 犬飼 敏彦 先生

「新時代を迎えた糖尿病治療戦略 -Durabilityを考慮した治療-

### 抄録

#### 1) 糖尿病臨床の現況

糖尿病患者の数は増加の一途を辿り、2030年には世界の成人での糖尿病患者数は5億5200万人、有病率は9.9%との予測がなされている。日本の糖尿病患者数は2012年の時点では、可能性が否定できない人を含めると2050万人に昇り、将に国民病となっている。日本糖尿病学会での新しい血糖コントロール目標はHbA1cとして3段階に分けられ、血糖正常化を目指すには6.0%未満、合併症予防のためには7.0%、治療強化が困難な際には8.0%未満が目標とされている。2013年に提唱された熊本宣言“Keep your HbA1c below 7%”のフレーズはまだ記憶に新しいものとする。一方、欧米でのADA/EASDにおける新しいステートメントは“patient-centered approach”であり、患者の臨床的背景を考慮して、血糖コントロールを厳格にする場合とより緩やかにする場合を区別すべきとの主張がなされている。いずれにしても、糖尿病治療の目標は、健常人と変わらない日常生活のQOLの維持と健康寿命の確保であり、その為には種々の合併症の発症、進展阻止が極めて重要であり、更にその達成のためには、集学的治療として、血糖のみならず、体重、血圧、血清脂質の良好なコントロール状態の維持が求められている。

#### 2) 糖尿病治療のパラダイムシフト

従来より、2型糖尿病の多彩な病態に対する経口血糖降下薬として、5系統の薬剤、すなわちインスリン分泌促進系としてSU剤、グリニド薬、インスリン抵抗性改善系としてはビグアナイド薬、チアゾリジン薬、糖吸収調節系として $\alpha$ -グリコシダーゼ阻害薬が使用され、臨床的有用性を示してきた。しかしながら、それらの薬剤の問題点として、低血糖の発現、体重増加、 $\beta$ 細胞機能の経年的低下等が挙げられ、新たな治療戦略の必要性が求められていた。そこで最近、登場した薬剤として、DPP-4阻害薬とSGLT2阻害薬が臨床の場で使用されるようになった。本講演ではそれらの2系統の新しい治療薬の特徴と臨床成績につき、概説していきたい。殊

にDPP-4阻害薬については、Durability（持続性、耐久性効果）について検討した最近の国際論文を紹介しながら、各薬剤の相違について考察していきたい。また、同阻害薬では“beyond blood glucose”としての多面性作用に関する最近の臨床研究、また心血管イベントを評価項目とした海外の大規模臨床研究（EXAMINE など）の結果につき言及していきたい。

### 3) 教室の臨床研究の紹介

消化管ホルモンであるガストリンは動物モデルで血糖を低下することが知られている。一方、消化器系薬剤であるPPI製剤は血清ガストリン値を上昇させる作用があり、その結果、血糖コントロールを改善させる可能性が期待される。そこで今回、私達は2型糖尿病患者を対象にDPP-4阻害薬（alogliptin）の単独療法とPPI製剤（lansoprazole）との併用療法とのオープン比較試験を行って血糖コントロール状態の変動を観察し、その結果を纏め論文発表（Endocr J 61:1031-9, 2014）したので、皆様には是非紹介したい。

#### ご略歴

昭和53年3月	群馬大学医学部卒業
昭和53年5月	群馬大学医学部第一内科 臨床研修医（小林節雄教授 主宰）
平成元年10月	医学博士の学位取得
平成元年12月	群馬大学医学部第一内科 助手
平成3年2月	米国・オレゴン州立医科大学 研究員（Prof. Greerに師事） 研究テーマ：「視床下部-下垂体-甲状腺系のSignal Transduc
平成4年9月	カナダ・アルバータ州立大学 研究員（Prof. Hoに師事） 研究テーマ：「ホルモン分泌機構におけるSignal Transducti
平成6年2月	獨協医科大学越谷病院一般内科 講師
平成7年12月	獨協医科大学越谷病院一般内科 助教授
平成13年4月	獨協医科大学越谷病院一般内科 教授
平成15年4月	獨協医科大学越谷病院内分泌代謝・血液・神経内科（呼称変更）
平成23年6月	獨協医科大学越谷病院糖尿病内分泌・血液内科（呼称変更）教授 現在に至る。



